

抄 録

音波歯ブラシ継続使用による効果

佐藤優莉

口腔の2大疾患のひとつに歯周病がある。平成28年歯科疾患実態調査によると、4 mm以上の歯周ポケットを持つ者の割合は、高齢になるにつれ増加しており、歯周疾患の予防・治療において、ブラッシングは必要不可欠である。近年、効率的に口腔清掃が行える電動歯ブラシや音波歯ブラシの市場規模は拡大し、身近なものとなっているが、臨床の現場では、大概の患者は手用歯ブラシを使用しており、音波歯ブラシを用いた歯科保健指導はあまり行われていないのが現状である。

本研究では、軽度～重度慢性歯周炎患者5名を対象に、音波歯ブラシの認知度や使用感などについて無記名質問紙法にて調査した。また、音波歯ブラシを28日間継続使用することによるイメージの変化、熟練度、口腔内状況の変化について調査した。音波歯ブラシ使用前後におけるPCR値およびBOP値の平均値の統計解析には、t検定（マイクロソフト社製Excel 2016）を用いた。

音波歯ブラシの認知度は、知っている者が60%で、ドラッグストアや家電量販店などで見かけることも多く、身近なものとなっている。音波歯ブラシ継続使用による熟練度は、慣れた者が80%、少し慣れた

者が20%であり、慣れるまでに1～2週間かかる者が多かった。ある一定期間、継続使用することが重要で、1回限り、その場限りの使用や指導では、効果的に音波歯ブラシを使用することは難しいと考えられる。音波歯ブラシ使用前後におけるPCR値およびBOP値は低下し、PCR値およびBOP値それぞれの平均の間には、有意な差（ $p<0.05$ ）が認められた。しかし、ヘモグロビンの検出については変化しなかった。このことから、継続使用により、効率的にブラッシングできるようになると同時に、歯周組織にも良い影響を与えることが明らかとなった。

以上のことから、より多くの患者に口腔清掃用具のひとつとして音波歯ブラシが導入されるよう、体験できる機会をつくる必要がある。また、音波歯ブラシを効率良く使いこなせるようになるには、個人差もあるが、ある一定期間、継続使用する必要がある。継続使用を踏まえた歯科保健指導を行っていくことは重要と言える。今後は、歯科衛生士として、個人に合った口腔清掃用具を選択・指導するとともに、より良い行動変容を促すために、理論に基づいたアプローチを行う必要があると考える。